ら、今では局長さんには辞表をたゝきつけるような勇氣はまるでない。そんな勇氣がなくなって仕合せだ。もしもそんな勇氣が局長さんにあったら、十五人がさっそくあぶすから飢えなければならないからなあ。

慶ちゃん、生活というもの、パンの問題というものは、北海道のようなしずかな天地においても人間を意氣地なしにしてしまうものだよ。局長さんを見ていると氣の毒でならぬ。

局長さんにとってもたいへんな事件が持ち上ったのだよ。はたの人から見ればなんでもないことなんだが。

三週間ばかり前のできごとなんだ。東京のほうから監督官が町の郵便局にやって來たのだ。

まだ雪がいくぶんのこっている庭をみんなで掃除するやら、窓をあらうやら、スタンプをふくやら、部屋をきれいにするやら、帳簿をせいりするやらで局長さんは二三日寐なかったのだそうだ。

ある部屋の戸がぐあいがわるくてよくすべらなかったので、もし監督官にそんなことでなんとか叱られると困ると思ったので、局長さんはしきいに油をぬらせたんだそうだ。どうしたはずみだったか、しきいにぬっていた油が廊下にこぼれたんだ。そして床板の上に大きな丸い油のしみができたんだ。局長さんはその油のしみが氣になって仕方がなかったのだ。監督官にそのしみを見つけられたらきっと悪い報告を書かれるにちがいないと思ったのだ。わるいことには、局の建物はきょねんできたばかりの新しい家だから、油のしみがばかに目立つんだ。

局長さんは氣になって氣になって仕方がなかったのだ。だからかんなをかけて見ようかと思ったが、かんなをかけても油は下までしみこんでいて仕方がないのだ。局長さんは夜おそくまで残って板の間のしみばかりごし〳〵こすっていたのだ。

君は『マクベス』という沙翁の芝居を知ってるかい？　マクベス夫人がま夜中に起きてはろうそくをともして、毎晩自分の手を水であらうのだ。

『わたしの手は人を殺した血がついている！』ってさ。

局長さんもやっぱりマクベス夫人と同じように神経質になってしまったんだ。油のゆういにとりつかれたんだ。

局から帰る道でも、家に帰りついても、局長さんの眼には新しい床板の上についた大きな油のしみばかりが、入道雲のようにうつってきたのだ。

いよ〳〵監督官が局へやって來たのだ。局長さんは油のしみの事ばかり考えていたので、監督官に何をたずねられてもとんちんかんな返事ばかりしているのだ。それでも帳簿の檢査も何もかもすんでしまって、幸いなことには監督官は大変な御氣嫌でみんなを引きつれながら、まっ先に廊下を歩いて行ったのだ。ところがちょうど油のしみの上に監督官の靴が乘っかったかと思うせつなに、あんまりよくしみの上を局長さんがふいておいたものだから、監督官はつるりと床板の上にすべってしまったのだ。

そして尻もちをついてしまったものだから、監督官の威嚴も何もめちゃ〳〵になってしまった。

くす〳〵と屬官たちがしのび笑いをした。しかし局長さんだけはまっ青な顔をして

今にも泣きだしそうであった。まったく人の善い局長さんは腰をぬかさんばかりに驚いてしまった。

「閣下、おけがはございませんか！」

局長さんはやっとこれだけいうことができた。

「いや、別になんでもないのです、ハッハッハ……」

監督官はきまりわるそうに腰をさすりながら笑った。

監督官は馬車にのってホテルへ帰った。

局長さんは監督官の馬車が動きだそうとするのを引きとめて、

「閣下、いやはや誠に、なんともおわびの申し上げようもございません。わたくしが別に悪意があってあんなことをいたしたのではございません……」

おず〳〵と局長さんは監督官の前にこれだけのことをいった。

「なんでもないよ。安心したまえ。ハッハッハ……」

監督官はホテルへ行った。

局長さんはまだ安心ができなかったのだ。
今度は局から帰るとすぐホテルにとびこんで行ったのだ。
監督官は東京からの遠い旅のつかれを休めるため、お湯にはいってのび〳〵と手足をのばしていたところであった。ホテルの女中が局長さんの名刺を持って來たのだ。
監督官はちょっとうるさいなと思ったが、それでも局長さんを部屋に案内させた。
「閣下、誠に恐れ入りますが、床板の油のしみを……」
「もうそれはわかっていますよ。何もそんなにあんたが心配せんでもいいのですよ」
監督官は苦笑しながら局長さんを見た。局長さんは心配しいしい家に帰って來た。
局長さんはその晩も油のしみのこと、監督官が尻もちをついたことを考えて夜っぴてねむれかったのだ。だから夜が明けるのを待ちかねてふたたびホテルへ行った。
監督官はつかれてまだ寐ていた。それでもぜひ局長さんがお目にかゝりたいというので仕方なしに起きて應接間に行った。
「閣下！　あれはまったく、わたしがぞんじませんことで！　なんともおわびの申し

上げようもございません。閣下……」
「君、もうあのことならよしてくれたまえ！　君はいつまでくだらぬことをいうのだ。僕はホテルに泊っていても、君が同じことばかりくりかえしいってくるので、ろくに休むこともできないじゃないか。じょうだんはいゝかげんによしときたまえ」
監督官はぴり〳〵とひたいの筋肉を動かして、今度はほんとうに怒ってしまったのだ。そしてガーンと扉をしめて出て行ってしまった。
さあ、局長さんは心配で心配でたまらなくなったのだ。もうあすは、きっと免職の辞令が下ってくるにちがいないと思ったのだ。家に帰ってもろく〳〵ものもいわなくなってしまったのだ。
それからずっと二週間ばかり、頭が痛いといって寐ていたが、心臓まひで死んでしまったのだ。
あとに残された三人のお婆さんと、奥さんと九人の子供と女中たちはあすからどうしたらいゝだらう。どうして食うことができるだろう。考えて見ると氣の毒でならぬ。

町の人たちはみんなでいくらか金を集めて、ともかく局長さんの遺族を内地へ送り帰してやろうと相談している。

青年詩人――空知川のほとり――北海道の局長さん――床板の油しみ――死――遺された家族たち――こう因果的に人間の一生を考えて見ると妙にさびしい氣がするじゃないか。

きょうは珍らしくいゝお天氣だ。風一つない。氣の弱い局長さんの魂を悲しむ教会堂の鐘が僕らの山の家までひゞいて來そうな感じかする。

狡猾な、人を押しのけて生きてゆくような、うそつきの、エゴイスティックな人の多い内地に住むことのできない、心の美しい氣の弱い局長さんのような人の魂が、この北海道の黒い土の中にいく千となくしずかにねむっていることであろう。

こないだ別れて行った炭燒き小屋の人たちや、局長さんの遺族の人たちや、北海道には心のやさしい人たちが、春が來てもさびしい心で青空をながめている。

春の風よ、炭燒きおじさんやあの娘たちの上にしずかに吹いてくれ。

春の風よ、局長さんの新しい墓の上にしずかに吹け！

四月二十五日

山の病院

芝太郎

慶ちゃん。

世の中というものは妙なものだ。れいのくま男だが、家のおじさんがやって來てからはなんと思ったのか、あまり、わがまゝなこともせず、神妙に働いているようだ。力で威張るやつはやっぱり力の前にはへこたれてしまうのだなあ。野良などを家のおじさんが西郷隆盛のような大きなからだでずしん〳〵と歩いているのを見ると、くま男の奴いまいましそうな顔をしながら、それでも神妙に畑をうったりして働いている。しかし悪い奴はどこまでも悪い奴だ。こないだもくま男があんまりしよげてるのがかわいそうだったから、僕たちはくま男に声をかけてやったのだ。そうすると急に狡猾

そうな笑い方をして、

「坊っちゃん、あんたの家にはとが飼ってありますなあ。わたしの家の子供らがほしがりますので二三日かしてくれませんか」

というのだ。

いやな奴だと思ったが、くま男の子供たちのことを思うとかわいそうだったからかしてやることにしたのだ。夕方くま男の子供が借りに來たからかごに入れてかしてやった。それから三日たっても四日たっても返しにこないからたずねてやったら、はとはかごぐるみぬすまれてしまったというのだ。失敬な奴だ。それならそれと挨拶をすればいゝのに、とふんがいしたものだ。

ところがほんとうはぬすまれたのじゃないのだ。殺して食ってしまったということをアレキじいさんの家にいるれいの九州の漁夫に聞いた。

「坊っちゃんの家からはとを借りて行ったのですが、くま男の奴、町で誰かにはとのなき声は病人のうなり声と同じだから、はとを飼うと病氣をするという話をきいたの

だそうですから、坊っちゃんの家へお返しすればいゝのに、はとの頭を石にたゝきつけて、首をねじ切って殺したのですよ。わたしはちゃんと見ていました」

とあの漁夫が知らせてくれた。悪い奴ではないか。僕も兄さんもこの話をきいた時は、はとがかわいそうで、一晩ねむれなかった。

兄ははとのふくしゅうをしてやるといってあのピストルを持ちだしたりしたが、おじさんは笑いながら、

「そんなばかなまねをする奴があるものか。あれだってやっぱり神さまの子だ。まあしばらくあのまゝにさせといたほうがいゝ」

なんてあの大きなずう体に似ず、おじさんはヤソ教徒の牧師みたいなことをいっていた。

ところがたいへんなことができたんだ。くま男がはとを殺した翌日、網走のほうから帰って來た男が悪い流行病を背負って來たのだ。二日三日のうちに村には三十人以上の疫病患者が出て來たのだ。毎日〳〵五六人の者がたんかで山のひ病院へ送られ

るのだ。

くま男の家の長男が病氣にかゝって山のひ病院で二日目に死んだ。次男が引きつゞいて山のひ病院へ送られて行った。

くま男はばかに子ぼんのうなんだ。だからもうまるで狂人のようになって長男の死がいをだいて泣いていたのだ。そして二言めには、

「おれの子を殺したのはひ病院の医者だ。山の病院では、毒藥をのませて人を殺すのだ、おれの次男まで殺したら山の病院に火をつけてやる。村中に火をつけてやる」

といってあばれていた。そしてしまいには山の病院から次男をうばいだして、村へ帰ってこようとするのだ。ひ病院の番人たちがどんなになだめてもしょうちしないのだ。それに困ったことには、流行病がこわいので、誰も山の病院に雇われて看護に行く人がいないのだ。医者だって村にはいないので、町からやって來ては逃げるようにまた町へ帰ってゆくのだ。みす〳〵助かる病人までが手のとゞかぬために死んでしまうのだ。くま男は毎晩山の病院に行っては、

「おれの子をかえせ！」

とどなっている。そして次男を病院からぬすみだしてこようとしている。

雨のふった晩など、

「おれの子をかえせ！」

とわめいているくま男の声をきくと、なんだかかわいそうになってくる。ふだんは悪い奴だが、あゝなってくると、ほんとうに氣の毒だ。子供を思う心は人一倍なんだから。

五月七日

ほとゝぎすの頃

慶ちゃん。

ゆうべはずいぶんすごい嵐だったよ。

芝太郎

その嵐の中に村では大さわぎが持ち上った。

くま男がまたやみにまぎれて、山の病院の窓を破って自分の子供をつれだそうとしたのだ。まるで猛獣がほえるようにわめきながら、山の病院の窓をこわしはじめたのだ。村中の人が集まって、くま男をとめにかかったのだ。

くま男はしまいには雨の中でわん〳〵男泣きに泣きだした。

「おれの子をかえせ！」

とわめいた。

まったくかわいそうはかわいそうなんだ。誰もすゝんで三十人の危険な病人を心からみとりしてくれる人がないものだから、くま男の次男だって、こく〳〵に病が危険におちいってゆくばかりなのだ！

誰か、危険をおかして山の上の病人たちを救う人はないのか！

五月十一日

×

芝太郎

慶ちゃん。家のおじさんが急にいなくなった。

変だと思ったらおじさんは僕らにも話さないで山の病院に行ったのだ。そしてこわがっている看護人たちをはげまして、自分は三十人からの危険な患者たちのまん中にすわって、夜も晝も氷嚢をかえたり、薬をのませたりして、病人をみてとっているのだ。

西郷隆盛のような、大きなからだをして、こわがっている若い医者たちを叱りながら、おじさんは病人をだいたり、背中をさすったりしている。

神さまのような人だと村の人たちはいっている。

僕たちはおじさんが悪い病氣に感染しなければいゝがとそればかり心配している。

五月十五日

×

慶ちゃん。

おじさんは実にえらいと思う。

芝太郎

とう〳〵二十日間というものは、ほとんど不眠不休で山の病院で働いた。そのおかげでたった二人亡くなっただけで、後の人はみんな丈夫になって山の病院をくだって村へ帰って來た。くま男もその次男をかゝえて山の病院から村へ帰って來た。いかにもうれしそうであった。

うちのおじさんは散歩からでも帰って來たようなのんきな顔をして、山の病院からもどって來た。

六月十日　　芝太郎

×

慶ちゃん。

おじさんはまだ毎日、のみをにぎっては木をきざんでいる。

羊も一日一日と大きくなって行く。

くま男が珍らしく、毎日のようにうちへやって來ては、ばれいいしょだの大根だのを置いて行く。

そして木をきざんでいるおじさんを見ては、

「あなたは人間ではありません。佛さまのようなお方だ！」

といってはおじさんを笑わせる。

「そうかい、ほんとうにわしは佛さまみたいかい。わしは大きいから仁王さまだろう、ハッハヽヽヽヽ」

「いゝえ、まったく佛さまでございます。わたしにあなたの像を一つきざんでください。わたしはそれを棚へかざって置きます」

くま男はまじめな顔でこういうのだ。

「じゃ一っこしらえて上げよう、ハッハッハヽヽヽヽ」

おじさんはそういっては木をきざんでいるが、でき上ったものは佛さまでも仁王さまでもない。いつもへたなねこだの犬だの、そんなふうなおもちゃだ。

くま男はいつもそのおもちゃをおしいただいて、子供のためにもらって帰るのだ。

「くま男はこのごろ生れかわったようじゃなあ！」

と村の人たちはいっている。
まったく、くま男は生れかわったように善くなった。
兄のピストルも永久に使わないですみそうだ。

六月二十日　　芝太郎

×

慶ちゃん。
おじさんはけさ村を立った。
大きなリュックサックのようなふくろを一つ背負って、大きな靴をはいて、カァーボーイのようなふちの広い帽子をかぶって、古びたぶくの背広をきて旅へ出た。どこへゆくのだかおじさん自身でもわからないそうだ。
「また村に帰って來てください！」
「また帰ってくるよ。徳松や、芝太郎が大きくなって大牧場を持つようになったころ帰ってくるよ、ハッハッハッハッハッ」

といって兄と僕の頭を、あの大きなおぼんのような手でなでた。
僕らは町のステーションまでいっしょに馬車で送って行った。
村の人たちもいのちの大恩人だといって、おじさんと別れることを悲しんで、旗をおし立てゝステーションまで行った。まるで昔の百姓一揆のようなさわぎだった。
きょうはくま男は僕らのためにぎょ者台に乗って馬車をぎょしてくれた。
汽車が出る時、くま男がまっ先に大きな手に顔をうずめて泣いた。村の人たちはまっ黒な手で顔をおおうて泣いた。
慶ちゃん。
おじさんが行ってしまったのでほんとうにさびしくなった。もう当分はおもしろい話もきかれなくなった。
窓の外には白いけしの花が、青い畑の中にすくすくと咲いている。
僕はこれから毎日、ガラス窓ごしにあの白いけしの花を眺めていることであろう。
夜はよくほととぎすがなく。

六月二十五日

ふるさとの友（おわり）

芝太郎

ふるさとの友

不許複製

納本

昭和二十四年一月二十日　印刷
昭和二十四年一月三十日　發行

定價　八十五圓

著者　吉田絃二郎

發行者　新宿區市ガ谷砂土原町二ノ四
今村源三郎

配給元　東京都千代田區神田淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

印刷者　東京都文京區初音町一五
宇高峯一

發行所　偕成社
東京都新宿區市ガ谷砂土原町二ノ四
会員番號A一一一〇一二
振替東京一三五二

暗黒大陸探検 **リビングストン**　池田宣政

猛獣毒蛇と戦い熱地アフリカを探検するリビングストン、愛と苦難の聖雄を描く。

愛と科学の母 **キュリー夫人**　山中峯太郎

いつくしみ深き母、よき妻、苦学時代より科学の母と仰がれる迄の波瀾と涙の物語。

愛の偉人 **ガーフィールド**　池田宣政

貧しい丸木小屋に生れ大統領となつたガーフィールド、母の愛と困苦の生涯を描く。

熱と愛の巨人 **野口英世**　池田宣政

貧家に生れた片端の少年から世界的大医学者へ！　熱と力と愛の偉人の感激物語。

あざらし少年　南沢十七島

ソロモンの秘宝はいずこに！　北氷洋の孤島を舞台に海賊とたたかう息づまる冒険。

湖底の魔城　南沢十七

湖底の魔城にとらわれた少年が死境を脱出悪魔の陰謀をくじく痛快な怪奇科学冒険。

孤島の祕密　南洋一郎

南海の孤島に炎々と燃えあがる怪殿堂！　怪火の謎をとく二少年！　決死の冒険。

白馬の小夜姫　村上元三

神出鬼沒、家康の祕策をつく美少女、怪僧忍術者等いり乱れての息詰る時代小説。

三銃士　久米元一

悪宰相の魔手から王妃を守る少年剣士と三銃士！　神出鬼沒の活躍と息づまる冒険。

白雲峡の謎　山中峯太郎

大王の秘宝・七つの壺を廻り北海の涯に極悪シネグロと戦う少年の手に汗にぎる冒険

ふるさとの友　吉田絃二郎

腕白少年賢吉、悲しき落魄の身を旧友達に温く迎えられる友情、感激、笑いの物語。

巖窟王　高垣眸

地下牢を脱出した怪傑クリスト伯、欧洲の天地を震撼させた冒険と怪奇の名作物語。

海底大陸　海野十三
怪光線を放ち地球をおびやかす海底人間！海底に乗込み謎をとく長良川博士の冒険。

孤島の十五少年　南洋一郎
絶海の孤島に漂着した十五名の少年が團結猛獣海賊等と戰う壯快無比の名作冒険。

古城の怪宝　久米元一
暗黒城の祕宝をめぐり次々に起る謎の殺人怪盗一味をあばく熱血探偵の活躍と冒険。

紅バラの祕密　久米元一
名宝をうばいあう怪盗團の魔手から逃れた快少年が名探偵とその謎をとく探偵冒険。

少年富豪　富沢有爲男
船底にもぐりこみ濠洲に密航した快少年が大富豪となるまでの大冒険と波瀾を描く。

密林の王者　南洋一郎
コンゴー、マレイ等の大密林で、次々に猛獣を征服する探検家、決死の冒険記録。

宇宙探検　海野十三
原子宇宙艇を操縦し、二少年が数々の困難をおかし宇宙の祕密をさぐる科学冒険。

怪獣男爵　横溝正史
怪獣男爵の正体は？次々に起る無氣味な事件！名探偵怪少年敏腕刑事の息詰る活躍

魔神島　南洋一郎
南海のはて、魔神おどる怪火の島に漂着した三少年！　手に汗にぎる海洋怪奇冒険。

アリとババと四十人の盗賊　太田黒克彦
ほかにシンジバートの航海、王城のランプ等、怪奇きわまるアラビヤの千一夜物語。

怪傑アラン　久米元一
突如現れた剣の達人、誘拐された少年を守り、波荒き北海の海賊船上颯爽と立つ！

密牢の叫び　野村愛正
革命の嵐にさらわれた少年、猛火より救つた司令官、断頭台上の露と散る、革命奇談

地球盗難　海野十三

魔の森に現われたウラゴーゴル星の怪物！次々に起る奇怪な事件をとく科学冒險。

名作冒險 **水滸傳**　久米元一

伏魔殿から四散した百八の豪傑が至る所に波瀾をまき起す豪快な中國の名作物語。

笑う氷山人　寒川光太郎

あッ指がない！凍結の人間が生きた。世紀の驚異！魔氷城の祕密あばく北氷國冒險！

恐龍の足音　高垣眸

前世紀の怪獸、蠻人等が棲息する人外の魔境アマゾン、英人探檢家の死線突破記！

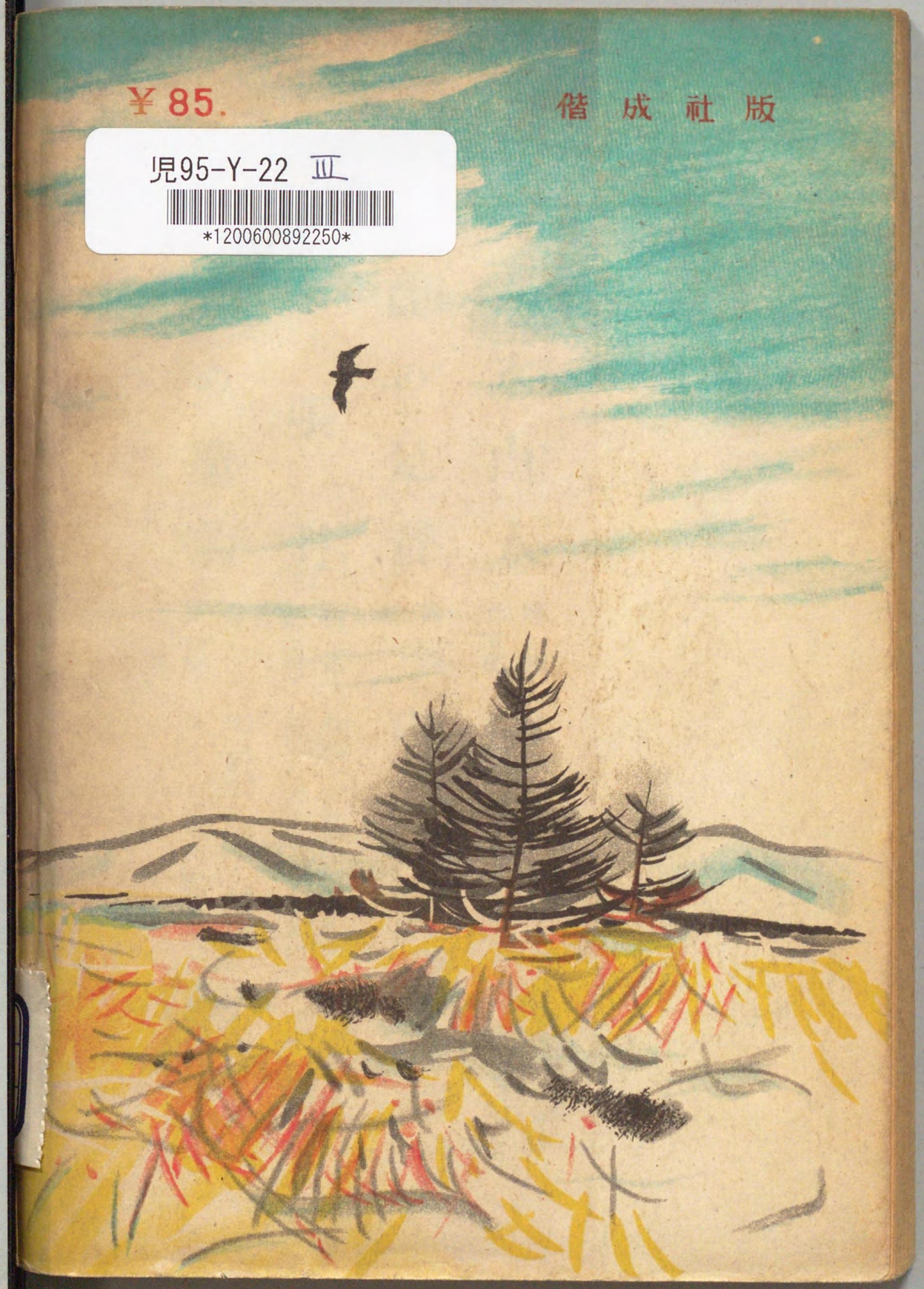
名作冒險 **弓張月**　山中峯太郎

豪雄の快男子、鎭西八郎爲朝、惡逆を打つ悲愴の大冒險、千変萬化する波瀾の生涯。

片耳の魔豹　南洋一郎

神出鬼沒の魔豹、人食虎の物語等、アフリカ・インド等における決死の猛獸狩冒險。

¥85.

偕成社版

児95-Y-22 Ⅲ
1200600892250